

公開講演会

柳田国男と西洋の学問

高木昌史

## 序

現在、本学民俗学研究所には、民俗学の創始者柳田国男から寄贈された膨大かつ貴重な書籍が収蔵されている。その中、洋書は単行本約一四〇〇冊余、雑誌は約九〇〇冊を数える<sup>①</sup>。柳田はその語学力を活かして多くの洋書を読んでいた。『柳田文庫蔵書目録』にその一覧がジャンル別に掲載されているが、中には『目録』に記載のない洋書もあったようだ。では、わが国に民俗学を樹立するに際して、柳田はどのような西洋文献を読んでいたのか、またそこから何を学び、それを自身の学問にどう活用したのか。今回は、従来あまり論究されることのなかったこの問題を探り上げてみたい。

柳田は、ある時期、集中的に西洋の文献を読破した。大正十（一九二一）年初春、沖縄・奄美旅行の帰路、彼は国際連盟委任統治委員を電報で打診され（『故郷七十年』<sup>②</sup>）、同年五月には、その仕事に就くべくジュネーヴに出発した。年末、一度帰国した後、翌十一年六月、彼は再度ジュネーヴに向かい、大正十二年九月までヨーロッパに滞在したが、関東大震災の報を受け、急遽ロンドンから同年十一月帰国した<sup>③</sup>。

以上、二度にわたる滞欧時代、柳田はヨーロッパ各国（ドイツ、フランス、オランダ、イタリア、イギリス等）を旅行し、行く先々で洋書を購入し日本に送った。渡欧以前から彼は洋書を読んでいたが、特にジュネーヴから帰国後の約十年間は、買い求めた英語、独語、仏語等の文献を精力的に研究した<sup>④</sup>。その様子は、彼の著作、例えば、『青年と学問』（一九二八年）、『民間伝承論』（一九三四年）そして『郷土生活の研究法』（一九三五年）等に窺われる<sup>⑤</sup>。今回は、この三冊を主に参照する。

## 一 時代環境

本題に入る前に、柳田が置かれた時代的な背景を瞥見しておきたい。柳田（松岡）国男は明治八年、すなわち、一八七五年、兵庫県辻川に生まれた。明治維新から間もない頃で、長く続いた鎖国が終わり、日本は世界、特に西洋に本格的に目を向け始めていた。

端緒を開いたのは福沢諭吉（一八三四―一九〇二）で、彼は生涯に三度欧米を旅し、その経験をもとに『西洋事情』（一八六六―七〇）を著したが、一八六三年、遣欧使節団の一員としてドイツに行った際には、ベルリンで晩年のヤーコプ・グリムを表敬訪問した可能性が高い<sup>7)</sup>。柳田が本格的に口承文芸の研究に着手したとき、中心に据えたのはグリム兄弟の『子供と家庭の童話集』であった<sup>8)</sup>。

柳田と縁の深い人物としては、先ず新渡戸稲造（一八六二―一九三三）の名が挙げられる。新渡戸は札幌農学校を卒業後、東京帝大で英文学と理財統計学を学び、私費でアメリカとドイツに留学、アメリカで『武士道』Busido（一九〇〇）を英語で刊行した。同じ農政学を専門にしていたこともあって、柳田は、新渡戸が帰国後、明治四十三（一九一〇）年『遠野物語』発表の年、後者とともに「郷土会」を立ち上げ、機関紙『郷土研究』（一九一三―一七年）を発刊している<sup>9)</sup>。その後、新渡戸は渡欧し国際連盟の事務次長になり、柳田を国際連盟委任統治委員に推挙した。二人は幾重にも強い絆で結ばれている。

新渡戸と同年の森鷗外（一八六二―一九三二）は、足掛け五年間、医学の研究のためにドイツに留学したが（一八八四―八八年）、医者の家系に生まれた柳田は、明治二十三（一八九〇）年、十五歳の折り、彼の実兄で医師の井上通泰の紹介で、ドイツから帰朝して間もない森鷗外を初めて訪ねている。以後、明治三十五（一九〇二）年頃まで、雑誌『しがらみ草紙』等を通じて、柳田は鷗外と親密に交流し、西欧文学への目を開かれた<sup>10)</sup>。

世紀が変わる一九〇〇年前後、西洋との関わりのある人物は多かった。例えば、美術評論家の岡倉天心（一八六二—一九一三）は、一八八六年にフェノロサと共に欧米に出張し、『東洋の理想』（一九〇三）を英語で刊行し<sup>11</sup>、夏目漱石（一八六七—一九一六）はイギリスに留学して（一九〇〇—〇三年）、帰国後、東京帝大で英文学を講じた<sup>12</sup>。柳田は日本人にとって西洋が強く意識された時代に生きた。森鷗外や新渡戸稲造など、西洋の息吹が直接感じられる環境の只中に彼はいたのである。

## 二 洋書文献

柳田が洋書文献を一気呵成に読んでいたジュネーヴ滞在前後、すなわち、一九一〇年頃から一九三〇年頃までの約二十年間は、翻ってみると、西洋では民俗学「フォークロア」や民族学「エスノロジー」が学問として確立され、しかも瞬く間にそれは隆盛を迎えていた。前述の柳田文庫には、当時ヨーロッパで刊行された重要文献が多数収蔵されている。初めに、その中から代表的なものをジャンル別に幾つか紹介し、続いて、それを柳田の著作と照合しながら、柳田民俗学の成立背景に光を投じてみたい。<sup>13</sup>

### 1 歴史／紀行文

\* ヘロドトス『エジプトとスキュタイア』Herodotus, *Egypt and Scythia, described by Herodotus*, [New York], 1886. (英訳版)

\* パウサニアス「ギリシア案内記」全六卷 Pausanias, *Pausanias's Description of Greece*, tr. with a commentary by J. G. Frazer, v. 1-6, London, 1913. (英訳版)

### 2 文学／文献学

\* J. ボルテ／G. ポリフカ『グリム兄弟の「子供と家庭の童話集」注解』全五巻 J. Bolte/G. Polivka, *Anmerkungen zu den Kinder-und Hausmärchen der Brüder Grimm*, 5Bde., Leipzig, 1913, 1915, 1918, 1930, 1932.

3 民族学／人類学

\* E. B. タイラー『原始文化』E. B. Tylor, *Primitive Culture*, London, 1913.

\* J. G. フレイザー『金枝篇』全十二巻（二巻欠）J. G. Frazer, *The Golden Bough*, London, 1911-1915.

\* J. G. フレイザー『旧約聖書のフォークロア』全三巻 J. G. Frazer, *Folk-lore in the Old Testament*, 3v., London, 1918.

4 社会哲学

\* L. ブリュール『原始神話学』Lévy-Bruhl, *La mythologie primitive*, 3. ed., Paris, 1935.

\* L. ブリュール『原始心性』Lévy-Bruhl, *Primitive mentality*, tr. by Lilian A. Clare, London, 1923. (英訳版)

三 民俗学の構築

柳田は自伝『故郷七十年』の中で、ジュネーヴ行き頃から民俗学研究への意志を固めていたことを告白している。<sup>14</sup>以前から洋書は購入していたが、ヨーロッパ滞在はその収集にとって格好の機会でもあった。大量の文献を活用して、彼はいいよいよ本格的に民俗学の構築に向けて踏み出すことになる。では、彼はどのような文献を読んでいたのか。

## 1 歴史／紀行文

民俗学を日本で確立するために、柳田は西洋の学問を組織的・体系的に研究した。そのために実に幅広く基本文献を収集した。先ず、古代ギリシアに彼は目を向けた。特に歴史家ヘロドトス、そして紀行文作家パウサニアスである。『青年と学問』に収録された「日本の民俗学」（一九二六年の講演、原題「民俗学の現状」）の中で、彼はこう語る（今日的には差別的表現もあるが、原文のまま引用する）。

しかるにエスノグラフィーまたそれから出たエスノロジイは、じっさい最初にはその土人のみの土俗を記述しまた考察する学問であつた。ヘロドトス以来、これが学者の常の癖であつて、自分らの生活様式思想または信仰は、普通のこと当り前のことで、ただこれから隔絶した奇異なるもののみが、智識として後代に伝ふる価値あるものと考えられていたのである。<sup>15</sup>

様々な民族の「土俗」を記述するエスノグラフィー／エスノロジイの原点に、柳田は古代ギリシアの歴史家ヘロドトスを位置づける。その際、「隔絶した奇異なるもの」への関心が根本動機にあつたと見る。また『郷土生活の研究法』の「諸外国の民俗研究」の章では「文書以外の史料を粗末にせぬということは、文献の乏しい国や時代には当然の話」であつたとして、彼はこう続ける。

従つて国民の間に伝わっている歴史などは、その全部がフォーククローアであつた。こんなことを言えば、プリニウスやパウサニオス、さてはヘロドトスもクセノフォンも、すべて郷土研究の鼻祖であつたと言える。<sup>16</sup>

「郷土研究」は、この場合、フォークロア（民俗学）あるいはエスノロジー（民族学）と殆ど同義である。文中、プリニウス Plinius は、『書簡集』Enfoteieを残した小プリニウス「紀元後六一―一四頃」ではなく、恐らく『博物誌』（自然誌 *Naturalis historia*）を著したローマの著述家大プリニウス（同二三―七九）と思われる。<sup>17</sup> パウサニアス（パウサニアス）Pausanias（紀元後一一五―一八〇）は『ギリシア案内記』で知られる紀行家である（後述）。クセノフォン Xenophon（紀元前四三〇―三三四頃）は小アジア遠征を記した『アナバシス』Anabasisの著者で、古代ギリシアの軍人・歴史家である。そして先述のヘロドトス Herodotos（紀元前四八四―四二五頃）は『歴史』Historiaiで有名な「歴史の父」<sup>18</sup>である。以下、ヘロドトスとパウサニアスを詳しく紹介する。

#### ヘロドトス

旅をして各地の地誌や風土、民族や民俗に関する貴重な記述を残した点で、右の四人は共通しているが、中でも小アジア（現トルコ西岸）のハリカルナッソス出身のヘロドトスは、ペルシア戦争という歴史的事件を大きな枠組に、リュディア、ペルシア、バビロニア（巻一・二）、エジプト（巻二・三）、リビア・スキュティア（巻四）、イオニア、キュプロス（巻五）、ギリシア本土（巻六―九）等、古代地中海世界と黒海周辺の遊牧民（スキュティア）の生活模様と伝承を、自らの旅の経験と結び合わせながら、壮大な作品『歴史』に仕上げた人物である。その意味で、彼は歴史家であると同時に、柳田の指摘するように、「民族学」と「民俗学」を一体化した、広義の「郷土研究」の「鼻祖」とも言える。

柳田文庫には、一覧に見る通り、英訳版ヘロドトスの『エジプトとスキュティア』が収蔵されている。二つの民族は、当時（紀元前五世紀）のギリシア人から見て「奇異なるもの」に満ちていたようで、それらを叙述した『歴史』の章をこの本は一冊にまとめている。柳田は、察するに、民俗学および民族学の両要素をそこに見出したにちがいない。地誌と風土、慣習と生活を、己の旅を媒介に叙述する手法は、他ならぬ柳田自身の紀行文（『海南

小記』、『雪国の春』、『秋風帖』等)のスタイルでもある。紀行文と言えば、『菅江真澄遊覧記』や古川古松軒の『東遊雜記』など<sup>19)</sup>、わが国の特に江戸期の文献を柳田は研究したが、洋書文献に親しむ中に、彼は古代ギリシアにすでに、大規模な世界旅行を試みて、各地域のフォークロアあるいはエスノロジーを記録した人物(ヘロドトス)がいたことに、少なからず刺激を受けていたのである。

### パウサニアス

一方、ヘロドトスと並んで、柳田は「郷土研究の鼻祖」としてパウサニアスの名を挙げる。『民間伝承論』の中で、彼は次のように指摘する。

人生を直接に観察する学問は、その起原だけならば必ずしも新しいものではない。「……」ポーザニアス Pausanias の著した『ギリシア記』も、フレエザー博士 Dr. Frazer が注意しているごとくに、その環境において人生を観察した書といひ得るのである。かかる点から考えると、我々の学問は史学と比較して新しい学問ではないのである。<sup>20)</sup>

「人生を直接に観察する学問」としての「民俗学」や「民族学」、柳田はその源流の一つをパウサニアスの『ギリシア記』に認める。古代ギリシアのこの紀行家は、小アジアのリュディア出身で、ギリシア、ローマ、シリア、パルステイナ、エジプトを旅し<sup>21)</sup>、とりわけギリシアを隈なく周遊して、『ギリシア案内記』 *Periegesis tes Hellados* を完成した。この作品は二世紀から十五世紀まで久しく忘れ去られていたようだが、一五一六年にヴェネツィアで初版が刊行されて以後、ギリシア考古学と宗教史にとつて不可欠の資料になった。<sup>22)</sup> アッティカを出発点に、ペロポネソス半島を時計回りに一周したあと、ボイオティアとフォキアを巡り歩くこの『案内記』では、



著者の旅の経験を土台に、各地の名所に関する歴史的・神話学的・人類学的な記述が彩り鮮やかに練り広げられている。西洋古典学の専門家として出発したイギリス人フレイザーは、一八八六年に『ギリシア案内記』の注釈付き英訳に着手した後、取材のために自らギリシアを旅行し（一八九〇年／一八九五年）、『案内記』を六巻で刊行した。<sup>(23)</sup>それは、フレイザーの他の著作『金枝篇』等と共に、柳田文庫に収蔵されている。

柳田はパウサニアスの『ギリシア案内記』を、「環境において人生を観察した書」と評価する。彫刻や壁画に関する叙述も多いこの『案内記』は、美術史的にも興味深い本だが、柳田はそこに何よりもフォークロアあるいはエスノロジー的な要素を読み取る。民俗学的紀行文の一種の原型（アーキタイプ）を、彼はそこに発見したのである。但し、柳田自身は、パウサニアスのように名所旧跡を訪ねる旅ではなく、庶民（常民）の生活環境を観察する旅を志したという違いはあるか。<sup>(24)</sup>

西洋の学問の源流である古代ギリシア、中でも、歴史家ヘロドトスと紀行家パウサニアスは、以上見るように、柳田の民俗学構築にとって重要な示唆を、直接的あるいは間接的に与えたと思われる。地誌と風土、慣習と伝承を、自らの旅の中で追体験しながら、民俗学的テキストへ編み上げる方法、柳田はその遙かなモデルを右の二人に見出したのである。

## 2 文学／文献学

明治三十八（一九〇五）年、当時三十歳の柳田は、親交のあつた国木田独歩が編集する『新古文林』に、エッセイ「幽冥談」を発表する。その中で彼はこう語る。

貴下<sup>あなた</sup>はお読みになつた事がないか知らぬけれども、ハイネの『諸神流竄記』という本がある。僕はそれを讀んだ時に非常に感じた。それは希臘<sup>ギリシヤ</sup>の神様のジユピターを始めとしてマルス、ヴィナスというような神様

が基督教に負けて、人の住まない山の中に逃げ込んだ。「……」ヴィナスはまたある山の中に洞穴ほらあなを作った。その中において基督教信者を騙だましておったというような事が書いてある。基督教から見ればこれらは一種の悪魔に近いが、希臘の昔の多神教から言えばほとんど台湾の鄭成功ていせき、国姓爺こくせいやぐらゐの信仰があるのであるけれども、ハイネは信仰のない人だからきわめて軽蔑した言葉で書いてある。<sup>(25)</sup>

## H・ハイネ

文中、『諸神流竄記』<sup>しよしんりゆうざんき</sup> Die Götter im Exil は、愛と革命のドイツ詩人ハインリヒ・ハイネ Heinrich Heine (1797-1856) の晩年の作品である。デュッセルドルフに生まれた彼は、ドイツで活躍したあと、一八三〇年にフランスで七月革命が勃発したのを機に、翌一八三二年四月以後パリに永住して、ドイツおよびフランスの新聞・雑誌の特派員などをしながら文筆生活を送った。『諸神流竄記』は一八五三年にフランスの『両世界評論』Revue des Deux Mondes 誌に Les dieux en exil の題で仏語で掲載され、続いて同年、独語版(最初の題は『悲惨な神々』Die Götter im Elend) が発表された。<sup>(26)</sup>

西洋では、キリスト教の普及によって、ジュピター(主神ゼウス)、マルス(軍神アレク)、そしてヴィナス(アフロディテ)等、異教(ギリシア神話)の神々は歴史の表舞台から追放された。ハイネはその様子を右の作品でイメージ豊かに描いている。かつては愛と美の女神として華やかに活躍したヴィナスも、今では山中の洞穴に暮らしている。彼女は、中世の有名なタンホイザー伝説では、人を現世的な快樂へと誘う魔女、すなわち、反キリスト教のシンボルの存在となっている。「希臘の昔の多神教」で崇拜されたヴィナスを、柳田は右のエッセイの中で「台湾の鄭成功、国姓爺」に譬える。鄭成功は、一六二四年、日本人を母親として平戸に生まれ、明の滅亡後、台湾を根拠地に、明朝復興運動の中心人物として清軍に抵抗した人物である。柳田は鄭成功をキリスト教世界に抵抗する異教の女神ヴィナスと二重写しにしたのだが、ここで重要なのは、歴史を構造化して重層的に見る彼の

視点である。先述「日本の民俗学」(『青年と学問』)の中で柳田は回想する。

我々が青年時代の愛読書ハインリヒ・ハイネの『諸神流竄記』などは、今からもう百年以上も前の著述であつたが、夙にその中には今日大いに発達すべかりし学問の芽生を見せている。「……」要するに耶蘇の宗教が一世を席卷したヨーロッパ大陸にも、なお百千年を隔てて豊富なる上代が活き残っていた。それが容易に平民の日常生活の中から掬取られるばかりでなく、新しい社会の動きさえも、暗々裡にこれに由つて左右せられる場合が多かつた。<sup>(29)</sup>

柳田民俗学の一つの特徴が、右の文章に凝縮されている。すなわち、日常生活の中に「活き残つて」いる歴史の古層、その暗闇に光を当てること。ハイネの『諸神流竄記』から柳田はこの重要な着想を読み取つたのである。今日、柳田文庫にはハイネ作品の中、『アッタ・トルル、夏の夜の夢』Atta Troll: ein Sommernachtstraum、『ハルツ紀行』Die Harzreise、および『新詩集』Neue Gedichte、以上三冊のレクラム文庫版が収蔵されている。<sup>(30)</sup> ハイネは文学青年柳田が愛読した西洋作家の一人であつたが、右の詩や紀行文の他に、彼が民俗学的・文化批判的なハイネ晩年の『諸神流竄記』(テキストは不明)に特に注目していた事実はきわめて重要である。柳田民俗学の原点の一つがそこに見出されるからだ。

ところで、『諸神流竄記』執筆に際して、ハイネは彼が敬愛するグリム兄弟の『子供と家庭の童話集』と『ドイツ伝説集』、およびヤーコプ・グリムの『ドイツ神話学』等に典拠を求めた。<sup>(31)</sup> そのハイネと同様、柳田も彼の民俗学のために、グリム兄弟の作品を集中的に研究し活用した。

## グリム兄弟

『郷土生活の研究法』の中で柳田は次のように語る。

学問はすなわち資料の最もよく整頓せられ、知識の標本の最も得やすい所を中心にして、発達すべき傾向をもつていたのである。大きな先例を一つ挙げると、独逸ではグリム兄弟が国内現存の民間説話をあつめ、同時にその研究に指をそめてから、これが因縁となつてこの国の説話学は大いに栄えた。二人の没後もその門流の手によつて、比較考証の書は年増しに大きくなつた。私の読んでゐるのは戦前にできた第二版三巻であるが、やがて大増補の新版が出るという話も聴いてゐるし、昨年はまたその第四巻として、同じボルテ、ポリファカ二氏の『世界民間説話史』も公刊せられてゐる。もちろんグリム以後においても、露西亞「ロシア」のアフアナシエフとか、蘇格蘭「スコットランド」のキャンベルとか、いちいち列挙し得られないほど、雄大なる説話採集が幾つも現れてゐる[……]いわゆるK・H・M『子供と家庭の童話集』の事業は、この方面においてまさしく世界に君臨してゐるのである。<sup>32)</sup>

ドイツのグリム兄弟が民間説話を収集したのみならず、研究にも着手したことに柳田はすでに注目していた。<sup>33)</sup>柳田が利用したレクラム文庫版のグリム兄弟編『子供と家庭の童話集』Brüder Grimm, Kinder- und Hausmärchen (KHM) 第三巻「研究篇」にはその成果が収められているが、以後の説話学はこの「研究篇」を起点に発展することになる。ヨハネス・ボルテとゲオルク・ポリファカ編集の『グリム兄弟の「子供と家庭の童話集」注解』J. Bolte/G. Polivka, Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm 全五巻 (B/P) は今日なお昔話研究の最重要文献の一つで、ジュネーヴ滞在時に柳田は最初の三巻(一九二二/一九二五/一九二八年刊)を入手し、帰国後にドイツで出版された残りの二巻(一九三〇/一九三二年)を、『郷土生活の研究

法』を執筆していた当時、日本で購入して、特に第四卷の「世界民間説話史」によって昔話に関する体系的な情報を得た。<sup>34</sup> 右の引用文はその事情を伝えている。グリム以降、柳田の指摘通り、ヨーロッパ各地で昔話研究は急速に進展した。ロシアのアファナシエフ Afanasev (一八二六—一八七二)<sup>35</sup> やスコットランドのキャンベル J. F. Campbell (一八二二—一八八五)<sup>36</sup> 等がそれで、柳田文庫には後者の『西高地地方の昔話』 Popular Tales of the West Highlands, London 1890-93全四巻が収蔵されている。

ところで、「世界に君臨している」と柳田が評したグリム兄弟の『子供と家庭の童話集』は、口承からの採話活動もさることながら、<sup>37</sup> それは文献学 Philologie の一大成果でもあった。グリム兄弟は、言語学、法律学、神話学、民俗学、中世文学等の分野で大きな業績を残したが、KHMの事業も、「研究篇」が示すように、周到な文献学的研究を土台にしていた。<sup>38</sup> 彼らの学問は先ずは文献学を基礎にしている。文献の原典批判・解釈・成立史・出典を厳密に検討する文献学を、グリム兄弟はKHMの「注釈篇」で模範的に実践した。<sup>39</sup> それによって、昔話に関する「資料」は「整頓」され、知識は「標本」として広く活用可能になり、口承文芸は学問として成立したのである。翻って考えると、日本に口承文芸学を確立するべく、柳田もまた『遠野物語』(一九一〇)や『日本の昔話』(一九三〇)を採話・編集したばかりではなく、『昔話採集手帖』を関敬吾と共に作成し、『日本昔話名彙』(一九四八年)を自身の監修の下に公刊した。<sup>41</sup> 恐らく、柳田はKHMとその後の事業(B/P)を研究しながら、文献学の重要性を十分に学んだにちがいない。口伝えの文芸である昔話には必然的に異同が伴うが、学問としてそれを捉えるためには、それだけ一層、『名彙』の作成など、文献学的な緻密さが不可欠であることを、彼は学んだのである。ハイネの文学、グリム兄弟の文献学は、柳田民俗学を支える確固たる礎となっている。

### 3 民族学／人類学

一九二六年の講演「Ethnologyとは何か」(『青年と学問』所収)の中で、柳田は次のように語る。

E.B. Tylor教授のときは、どうとう一生の間 Ethnology という語は使用せず、ちょうどフランスのエトノロジーと同じ内容の学問を、終始 Anthropology という名称のもとに講説し著述していたのである。その門下の出身にして藍より青しの評のある Sir James Frazer のときは、我々の知る限りにおいて最も精励なる学者であり、劃時代的大著をいくつも発表して、七十の老翁となっても孜孜として学問をしている人だが、彼は師匠のタイラー先生とは違って、骨の寸法や目の色毛の色、または地下の石器人骨にはさして興味を有「も」たず、今の東京帝国大学の人類学教室などで、すこしも遣ろうとしない方の学問、たとえば興術の盛衰、靈魂不滅思想の發達、旧約全書古伝の構成、または同族避婚の慣習の分布および意義という類の題目に、その生涯の精力を傾注していたにもかかわらず、なお自分の学問を Social Anthropology、すなわち社会人類学と標識しておった。<sup>(42)</sup>

文中、エドワード・バーネット・タイラー Edward Burnet Tylor (一八三二—一九一七) はイギリスの人類学・民族学の学者で、オクスフォード大学人類学の初代教授を勤めた。未開民族の中に、文明人の先祖が通過した太古の文化要素の「残存」 survival を認めたことでも知られ、柳田文庫には、代表作『原始文化』 Primitive Culture (一八七二) 二卷 (一九一三年版) や『人類学』 Anthropology (一八八一) (一九〇四／一九一三年版) 等が収蔵されている。<sup>(43)</sup> 一方、ジェイムズ・ジョージ・フレイザー James George Frazer (一八五四—一九四一) は法律学、古典文献学、人類学、民族学を修めたイギリス人で、一九〇七年からリヴァプール大学の社会人類学教授、一九〇八年からはケムブリッジ大学私講師を勤める傍ら、著述活動に専念した。一八九六／九七年に前記パウサニアスの『ギリシア案内記』の注釈付き英訳を刊行した他、タイラーや東洋学者・宗教史家のウイリアム・ロバートソン・スミス William Robertson Smith (一八四六—一九九四) 等の影響下に多くの名著を残した(後述)。<sup>(44)</sup> 柳田が

最も熱心に研究した西洋人学者と言つてよい。

### J・G・フレイザー

柳田は先の引用文の中で、イギリスの学術用語では「民族学」「エスノロジー」ではなく「人類学」という名称が好んで用いられること、その代表にE・B・タイラーやJ・G・フレイザーがいるが、師タイラーとは異なつて、フレイザーが「呪術」や「靈魂不滅」、「旧約全書」「聖書」や「同族避婚」(族外結婚)等の研究に生涯を捧げたこと、そして彼が自分の学問を「社会人類学」と呼んでいたことなどを解説している。柳田はイギリス人類学派を幅広く研究したが、中でもフレイザーの著作には徹底的に取り組み、そこから多くのものを学んだ。現在、柳田文庫にはフレイザーの作品が多数収蔵されている。主要なものは次の通りである。<sup>16)</sup>

#### \*『金枝篇』The Golden Bough

- 第一部「呪術と王の進化」The magic art and the evolution of kings、第三版、第一・二巻、一九一一年／第二部「タブーと魂の危機」Taboo and the perils of the soul、第三版、一九二七年／第三部「死にゆく神」The dying God、第三版、一九一二年／第四部「アドニス・アッティス・オシリス」東洋宗教史の研究」Adonis, Attis, Osiris: studies in the history of oriental religion、第三版、第一・二巻、一九二七年／第五部「穀霊と山野霊」Spirits of the corn and of the wild、第三版、第一・二巻、一九一二年／第六部「身代り」The scapegoat、第三版、一九一三年／第七部「美しき神バルデル」ヨーロッパの火祭りと身体から離れた魂の教義」Balder the beautiful: the fire-festivals of Europe and the doctrine of the external soul、第三版、第二巻(第一巻は欠如)／「書誌と総索引」Bibliography and general index、第三改訂増補版、一九一五年、以上全十二巻(二巻欠)。

\*『旧約聖書のフォークロア 宗教・伝説・法律の比較研究』Folklore in the Old Testament: studies in comparative religion, legend and law' 全三巻、一九一八年。

\*『トーテニズムと族外結婚 俗信と社会の初期形態論』Totemism and exogamy: a treatise on certain early forms of superstition and society' 全四巻、一九一〇年。

以上の他、講義録として、『王権の初期の歴史についての講義』Lectures on the early history of the kingship、一九〇五年、『不死信仰と死者崇拜』The belief in immortality and the worship of the dead、1911-1912、第二・三巻、一九二四年等、そして他の著作、『火の起源の神話』Myths of the origin of fire、一九三〇年、『サイキス・タスク』Psyche's task、一九二三年、『自然崇拜』The worship of nature、第一巻、一九二六年、『原稿集成 随筆・講演・論評』Garnered Sheaves: essays, addresses, and reviews、一九三一年等。

フレイザーの膨大な著作の殆どすべてが見られ、収集の徹底ぶりに驚かされる。<sup>47</sup>ところで、柳田はいつ頃からフレイザーを読んでいたのか。田中藤司氏の「柳田文庫所蔵読了自記洋書目録・略年表」<sup>48</sup>によると、明治四十四（一九一一年）年に、柳田は南方熊楠からフレイザーの『トーテニズムと族外結婚』や『アドニス・アッティス・オシリス』（『金枝篇』第四部）を紹介され、翌一九二二年には『金枝篇』五冊を読了して、南方に『穀霊と山野霊』（同第五部）購入を報告している。<sup>49</sup>その後、『身代り』（同第六部）、『美しき神バルドル』（同第七部）そして『王権の初期の歴史についての講義』を読了し（一九一四／一五年）、一九一九／二〇年に『旧約聖書のフォークロア』第一・二巻、最後に、一九三七年に『原稿集成』第四章を読み終えている。以上は記録がある限りで、総じて、原書刊行から時を置かず柳田がフレイザーを読了していたことが分かる。そのスピードには瞠目すべきものがあるが、何より注目されるのは、柳田のフレイザー研究の内容的豊かさである。

柳田自身の著作の随所には、実際、その研究の痕跡が発見される。例えば、晩年の『海上の道』（一九六〇）は、



『金枝篇』第五部を背景に、「穀霊相続の信仰」<sup>50</sup>を、また「国語史のために」(一九五三)では「穀物霊」<sup>51</sup>を論じ、「倉稲魂」ウガノミタマ」考」(未完草稿)はフレイザーの『穀霊と山野霊』に関連して、その〈東西の一致〉に読者の注意を喚起している。<sup>52</sup>他、『神樹篇』(一九五三)の中のアイヌのイナオの木や『信州随筆』(一九三六)の「寄生木」<sup>54</sup>等々、柳田はしばしばフレイザーに言及している。要するに、柳田はこのイギリスの人類学者の作品を読みながら、自身の民俗学を構築するための題材やヒントを多数発見していたのである。彼のフレイザー受容に関しては、すでに幾つかの研究があるが、総合的な考証は、恐らく今後の大きな課題と思われる。柳田民俗学の魅力の一つは、そのスケールの大きさにある。フレイザーの「劃時代的大著」が柳田の視野を大いに広げ、彼の思考を深化させたことは、「穀物霊」のテーマ一つを見ても明らかで、「陶醉するような気持で」フレイザーの『金枝篇』を読んだことを、柳田は晩年にも情熱的に語っている(一九四九年の対談「民俗学から民族学へ」後述)。

#### 4 社会哲学

イギリスの人類学に相当する学問は、フランスでは民族学であると、講演「Ethnologyとは何か」(『青年と学問』所収)の中で柳田は言い、こう続ける。

国によりまた学者により、Ethnologyくらしい区々不同の範囲を持つている学問はない。フランスではこの一九二六年の二月、パリにInstitut d'Ethnologie民俗学院を置いてこれを大学に附属せしめた。Lévy Bruhlの書いたその創立趣旨に関する一文が、Revue d'Ethnographie『民俗誌評論』に載せられている。元來あの国においては、エトノロジーとエトノグラフィとは、ほぼ同じ心持ちに用いられている。<sup>56</sup>

柳田は当時、学問の先進地域であったヨーロッパの現状を調べた際に、学術用語の問題に関しては最後まで悩

まされていた。肝心の「民俗学」と「民族学」および「人類学」との境界は、相互に関係が深いだけに、線引きが難しく、右の講演の中でも、フランス語 *ethnologie* を「民族学」ではなく「民俗学」と訳している。両学問の区別については次章で詳しく触れることにし、ここでは、右の引用で名指された人物に注目してみたい。

### レヴィ・ブルジュール

フランスの哲学者レヴィ・ブルジュール Lévy-Bruhl (一八五七—一九三九) は、一九〇四年以降、ソルボンヌ大学で現代哲学史の教授を勤めた人物で、社会学および民族学に深い関心を抱き、これらの分野で独自の思想を展開したことでも知られる<sup>(57)</sup>。柳田が特に研究したフランスの学者の一人はこのレヴィ・ブルジュールであった。柳田文庫には彼の『原始神話学 オーストラリア人とパプア人の神話的世界』*La mythologie primitive: le monde mythique des Australiens et des Papous*, Paris, 1935 第三版と英訳『原始心性』*Primitive mentality*, tr. by Lilian A. Clare, London, 1923 が収蔵されている。

題名にもあるように、レヴィ・ブルジュールの考察のキーワードは〈原始的〉*primitive* である。『原始心性』の「まえがき」で彼は言う。「それ故に私は、原始人があらゆる側から取り囲まれていると感じている目に見えない力とは何なのか、それを研究することに執着した。―彼らの夢、彼らが観察する、あるいは彼らが感じる予兆、試練、悪しき死等々である<sup>(58)</sup>」。これは神話、伝説、昔話の不思議な世界に通じる「心性」*mentality* に他ならない。レヴィ・ブルジュールの出世作である『未開社会の思惟』*Les Fonctions mentales dans les sociétés inférieures*, 1910<sup>(59)</sup> の中心テーマは、未開社会における論理以前の思惟、「原始心理の研究」であった。

一体、十九世紀末から二十世紀初頭にかけてのヨーロッパでは、様々な視点から「原始的心性」への関心が急激に高まっていた。イギリス人類学派の E・B・タイラーの『原始文化』二巻を筆頭に、フレイザーの『金枝篇』(一八九〇—一九一五)、ドイツ語圏ではヴィルヘルム・ヴントの『民族心理学』*Wilhelm Wundt*,

Völkerpsychologie, 1912-1921全十卷<sup>(60)</sup>、ジークムント・フロイトの『トータルとタブー』（ドイツ語原書は一九一三年刊、柳田文庫は英訳版 Sigmund Freud, Totem and Taboo, 1918を所蔵）等がそれで、〈原始的〉なものの特性は、当時、社会学や民族学、人類学や心理学といった学問が互いに交錯する学際的な場で研究されていた。柳田はレヴィ・ブルユールの『原始心性』に関して次のように所感を述べている。

全体に欧米の学者たちには、古風と今風とがあたかも淡水と鹹水<sup>かんすい</sup>とのように、二立て別々に存するものと思っている人が多いらしい。中でもレヴィ・ブルユールの『原始人心境』『原始心性』などはこれを強調した著述の著名なものである。しかしこの日本のあたかも川口の潮の上げ下げのごとき<sup>さか</sup>状を見たら、良心ある学者ならば必ず大いなる但書を添えずにはいなかっただであらう。いわゆる合の子文明はひとり日本のみでなく、東洋のいずれの湊に行ってもそれぞれこれが見られるのである。文化の複合には必ずしも定まった方式はない（『郷土生活の研究法』<sup>(61)</sup>）。

レヴィ・ブルユールは「前論理的思考」と「論理的思考」、「未開」と「文明」を極端に先鋭化して区別する傾向（柳田はそれを「古風と今風」、「淡水と鹹水」と表現する）はあるものの（ある意味、意図的？）、人間の精神構造の多層性あるいは多様性（柳田は「合の子」、「文化の複合」と呼ぶ）を、民族学的あるいは社会学的に浮き彫りにした功績は大きい。その業績には心理学的な側面もあり、言ってみれば、広義の「社会哲学」という名称が彼の学問には妥当するのかも知れない。タイラーは「残留<sup>サツツァイカール</sup>」という用語を使ったが、レヴィ・ブルユールはそれを人間心理の深層に向けて掘り下げたのである<sup>(62)</sup>。

『原始心性』のフランス語版 *La Mentalité primitive* が出版されたのは一九二二年であった。それから十五年後（一九三六年）、スイスの深層心理学者カール・グスタフ・ユング Carl Gustav Jung（一八七五—一九六一）は有名

な論文『集合的無意識の概念』Der Begriff des kollektiven Unbewusstseinsを發表する。その中で彼は「集合的無意識」についてこう語る。それは個人的無意識に由来するのではない「心」の部分であり、個人的な無意識が、一度は意識されながら、忘れ去られ抑圧されたために意識から消えてしまったものであるのに対し、集合的無意識は、一度も意識されることがなく、個人的に獲得されたものでもなく、「遺伝」によって存在しているものである。ユングは続ける。「未開人の心理について言えば、それはレヴィーブルユールの〈集団表象〉という概念に当たる」<sup>(64)</sup>。深層心理学者ユングはこのように、彼の「集合的無意識」のテーゼを構築するに際して、レヴィーブルユールの『未開社会の思惟』中の「集団表象」representations collectivesの概念を応用した<sup>(65)</sup>。ブリュールによると、「集団表象」とは「社会集団の成員に共通で、その社会内で世代から世代へ伝えられ、個々の成員を拘束し、それぞれの場合に応じて対象に尊敬、畏怖、崇拜の感銘を成員に呼び起す」もので、「集団表象の存否は個人の力に左右されない」(同書「緒論」<sup>(66)</sup>)のである。ユングの「集合的無意識」は、これに比べて、全人類的な次元にまで拡大あるいは深化された概念と言えるかも知れない。「原始的」primitivの概念は、これを空間的・地理的―換言すれば、水平的―に捉えるならば、民族学や社会学の問題として未開社会のイメージと結び付き、これを時間的・精神的―換言すれば、垂直的―に捉えると、深層心理学の問題として文明社会の只中に潜む原始的の「心」(魂)のイメージに結び付き性格を持っている。

柳田も、実は、民間伝承や慣習といった「民族心理」を反映する諸事象に、「私たちの学問、即ち民族固有の思想と信仰と感情、此等のものから生れてくる国の歴史の特殊性の研究」<sup>(67)</sup>を究明する鍵があるとして、「無意識伝承」<sup>(68)</sup>に注意を促していた。社会の現象を、このように深層心理学的に掘り下げる方法を柳田に示唆した人物の一人は、間違いなく、レヴィーブルユールであった。

## 四 二つのミンゾクガク

前章では、柳田が研究した西洋の学問を分野別に、1 歴史／紀行文（ヘロドトス／パウサニアス）、2 文学／文献学（ハインネ／グリム兄弟）、3 民族学／人類学（フレイザー）、そして4 社会哲学（レヴィーブルリユール）の順に見てきたが（膨大な文献のほんの一部である）、本章では、締め括りに、彼を最後まで悩ませていた問題に触れておきたい。他でもない、二つのミンゾクガク、すなわち、フォークロア民族学とエスノロジー民族学の区別と関係である。講演「Ethnologyとは何か」の中で、柳田はこう回想する。

前年私はベルリンの或る古本屋で、盲捜しに参考書を買集めようとしていた時、じつはまだフォークロアをドイツ語で何と訳すのかわからずにいた。ちょうどそこへコロムビヤ大学のボアス教授が来ていて教えてもらった。貴君はフォークロアの本を捜すならフォルクスクンデといわなければ解らぬ。フェルケルンデと謂えばドイツ語ではエスノロジーまたはエスノグラフィになるのだと教えてくれた。すなわちこの国では二つの学問は近いけれども別々であって、そうしてその名称の相違が、ちょうど二つの学問の成立ちと相互関係とを適切に説明していたのである。すなわち同じくフォルクまたエトノス（民族）に関する智識であつても、一方は単数の形を使ってわが民族のことを、他方は複数名詞で多くの民族、自国以外の異人種的生活を、概括して研究すべきもので、もとはこの通りはつきりとした自他の差別があつたのである。

Ethnology 「エスノロジー」の概念は、国や学者によって「区々不同」であるため、特にFolklore 「フォークロア」との差異について思い悩んでいた柳田に、ボアス教授は「民俗学」はドイツ語でVolkskunde 「フォルク

スクンデ]、「民族学」は Völklerkunde [「フェルカークンデ」と言うこと、前者は単数 Volk を、後者は複数 Völkler を研究対象としていることを示唆してくれたのである。英語では「民俗学」folklore と「民族学」ethnology との区別は分かりにくいのが、独語ではそれが明確で、目から鱗の感を柳田は抱いたようだ。(ちなみに、独語の Volks(Völkler)kunde の Kunde は「知識／学」を意味し、英語の lore に相当する。また英語の ethnology／独語 Ethnologie はギリシア語の ethnos [「エトノス」]「民族／群衆／国民／非ギリシア人／異教徒」に関する学問の意。)

ベルリンの古書店で柳田が遭遇したボアス教授 (フランツ・ボアス Franz Boas、一八五八—一九三六) は、ドイツ出身で一八八七年にアメリカ合衆国に移住し、一八九九年から亡くなる一九三六年までコロンビア大学の教授を勤めた、アメリカ文化人類学の先駆者である。ちょうどイギリス人類学における E・B・タイラーの位置を占める彼は、口承の物語を古い文化の鏡と捉え、民族学の資料として、弟子と共に昔話を収集したことでも知られる(『菊と刀』で有名な文化人類学者ルース・ベネディクトは彼の弟子)。<sup>71)</sup>

ところでドイツ語 Volk [「フォルク」(英語 folk) は、中世ドイツ語の「人々／民衆」volc、古高ドイツ語の「群衆／傭兵隊」folc に由来する言葉で、ラテン語の「民衆」plebs [「プレーブス」]に相当する。<sup>72)</sup> plebs は、「貴族／名門」の意の nobilitas [「ノービリタース」]に対して(「ローマ」市民／平民／民衆)を意味する。<sup>73)</sup> 従って、Volk には、元来、柳田のいわゆる「常民」のニュアンスが内在する。ただ、ドイツでは、十五・六世紀の人文主義の時代、民族意識の目覚めとともに、Volk には言語・文化・歴史によって国家に統一された人々の総体即ち「民族」の意味が加わった。その意味は十八世紀末から十九世紀初頭のロマン主義の展開(ヘルダー等)の中で定着し、最終的に、Volk には民族と民衆、両方の意味が併存した。そういうわけで、フォルクスクンデ(民俗学)およびフェルカークンデ(民族学) いずれにも、Volk のこの二つの意味合いが潜んでいる。では、柳田自身は、当時の日本にあって、彼の民俗学をどのように位置付けていたのか。

我々の民間伝承論が、この広義の人類学の中に、どれだけの領域を現在には持っているか、かつまたどれまでの役目を果すのが相当であるかということは、不幸にして今はまだ二つの別々の問題である。私たちは実着の歩みを踏みしめて行くために、特にまず一国民俗学の確立を期し、これによって将来の世界民俗学の素地を用意し、これに働く人々の習練に資するを順序としているのである。(『民間伝承論』<sup>(75)</sup>)。

いわゆる「一国民俗学」の提唱である。日本の民俗／民族 *Völker* について「実着の歩み」を先ずは固めるべきことを柳田は呼びかけ、他の諸国の民俗／民族 *Völker* との比較（＝民族学あるいは人類学）、換言すれば、「世界民俗学」は、現在のところ、措くべきことを確認したのである。ただ、彼のフレイザー研究からも分かるように、柳田の視界から「民族学」「エスノロジー」や「人類学」「アンソロポロジー」が完全に消えてしまったわけではない。例えば、還暦を過ぎてから本格的に取り組んだ昔話研究においては、彼自身、民族学的な比較が必要であることを痛感していた。<sup>(76)</sup>

ところで、一国（民族）の民間信仰や慣習や儀礼などを研究する「民俗学」「フォークロア」に対して、「民族学」「エスノロジー」は複数の民族のそれを比較し、さらに「人類学」「アンソロポロジー」はそれらの要素を全人類に共通の根源にまで遡及して考察しようとする<sup>(77)</sup>。その際、貴重な手掛かりを与えてくれるのが自然民族の文化であることを、十九世紀後半、ヴィクトリア朝のイギリスの人類学者、特に前述 E・B・タイラーは論証した。この「人類学の父」に続いて、J・G・フレイザーはギリシア・ローマ古典学や聖書学、それに自然民族に関する豊かな情報を背景に考察を深め、『金枝篇』や『旧約聖書のフォークロア』等の名著を残した。柳田はその業績を最後にこう総括する。

フレイザーのごときは、その師タイラーの勇猛な学説を祖述して、いわゆる文明の中に残留する野蛮の痕

跡を、指示すること最も丁寧であつたが、彼の著『旧約全書のフォークロア』三卷に至ってはさらに同一研究法を押し及ぼして、つきつぎに昔今の多くの民族の前代を知得する手段とした。自分らをして言わしむれば、これフォークロアとエスノロジーとの婚約であつた（『民間伝承論』<sup>28</sup>）。

民俗学「フォークロア」と民族学「エスノロジー」との「婚約」、それは柳田にとって究極の理想だったのである。

### 結び―柳田國男の晩年

若い頃、森鷗外や新渡戸稲造などから柳田は西洋の息吹を直接浴びていたが、壮年期のヨーロッパ滞在を経て、晩年に至つても、彼の周辺には、西洋の波が絶えず押し寄せた。中でも、彼の学問の位相を見る上に、岡正雄と石田英一郎の存在は大きい。

#### 岡正雄

岡正雄（一八九八―一九八二）は大正十三（一九二四）年、初めて柳田を訪れた。そして翌一九二五年には、柳田を中心に、民族学／民俗学の総合誌『民族』を創刊したが、柳田邸の書庫を手伝ったあと、『民族』を休刊し、昭和四（一九二九）年、渋沢敏三の援助によってウィーン大学で民族学を学び、同大学から博士号を授与され、一九三五年帰国した。<sup>29</sup>

一九三八年、岡は同大学日本学研究所の所長としてふたたびウィーンに渡り、一九四〇年まで同地に滞在した。戦後、日本民族学協会理事長としても活躍した彼は、論文「日本民俗学への二、三の提案」の中でこう語る。



日本民俗学は、いままで日本という一国の、単民族の文化の研究を使命としてきた。しかし日本民族文化は、孤立した存在ではない。日本民族文化は比較民族学的研究によってだんだんに、日本列島外の他民族文化の研究から多民族文化の研究、すなわち比較民族学的研究に進む傾向を強めるであろうし、また私はそうなるのが必要でもあり、当然であると思う。<sup>80</sup>

一国民俗学から比較民族学への視点の転換を、岡はこのように呼びかけた。グローバルな位相の中で日本民族文化を捉えること、この方向性は柳田と関わりの深いもう一人の人物によってさらに具体的に推進された。

#### 石田英一郎

その人物、石田英一郎（一九〇三—一九六八）は大正十三／十四（一九二四／二五）年に京都帝国大学文学部で行われていたニコライ・ネフスキー（大阪外国語専門学校教師）のロシア語の講義に出席した際、彼から柳田国男、折口信夫そしてフレイザーのことを聞き、民族学や人類学に対する関心と呼び覚まされた。<sup>81</sup>その後、昭和十（一九三五）年、東京の日本青年会館で開催された柳田の還暦記念日本民俗学講習会に出席し、その折、ウィーンから帰国して直後の岡正雄と知り合い、勧められて昭和十二（一九三七）年からウィーン大学で民族学を学び、昭和十四年に留学を終えて帰国後、南樺太や中国の華北、内蒙古等で実地調査をし、第二次世界大戦後、学会誌『民族学研究』の編集責任者となった。昭和二十四（一九四九）年、彼は同誌のために、柳田国男と折口信夫と共に二回にわたって座談会を開催した。<sup>82</sup>それは晩年の柳田の所感を知る上に貴重である。

ところで、石田は柳田との関連で代表作二点を刊行した。一つは柳田の『山島民譚集』（一）中の「河童駒引」（一九一四—一九四二）<sup>83</sup>を土台に執筆された『河童駒引考』（一九四八）<sup>84</sup>で、副題は「比較民族学的研究」、他の一冊は

柳田の『桃太郎の誕生』（一九三三／一九四二<sup>85</sup>）に対する『桃太郎の母』（一九五六<sup>86</sup>、副題は「ある文化史的研究」である。『河童駒引考』は「文化史または人類文化史の復原」（新版序文）を企図し、「第一版序文」によれば、「河童駒引といふ様な我が山村僻陬「へきすう」の民間伝承を捉へ、之を亜欧大陸の東西に互る資料と比較しつつ、問題を人類文化史の重要な一側面にまで展開せしめた」作品で、柳田の「一国民俗学」に対する「比較民族学」の立場を示している。また『桃太郎の母』所収の同名の論文では、柳田の『桃太郎の誕生』を念頭に、例えば「処女懐胎」のテーマを扱い、わが国の「うつぼ舟」伝説とローマ・カトリックのマリア崇拜を比較している。また柳田の提示した「小サ子思想」の謎を解く鍵をアジア大陸のシヤマニズムに探る。要するに、石田は、日本の神話・伝説・昔話の様々なモチーフを世界、特にユーラシアの文化圏との深い結び付きから解読しようとする。その石田が司会した座談会『民俗学から民族学へ』（一九四九）（先述）の中で、当時七十四歳の柳田は、彼自身の民間説話の研究を振り返りながらこう語る。

われわれの気づいたことは、いわゆるアントロポスの共通性、種族相互間の説明しえられぬ類似ということのだった。数百年をかさねて文化の移動を説き、文化圏を説き、諸民族の交渉ということ、もしくは民族の由来根源ということを説いていながら、こんなにはつきりとした争うべからざる一致が国際間にあつて、しかもまだ少しも説明がつかない。これなんかはいちばんはつきりした未完成の実例であります。「……」とかく民間説話の世界的一致は、いつかは開かるべき現代の深秘の扉であつて「……」。

世界中に昔話の類話が分布するのは何故なのか、この謎を解明する作業は様々な視点（多元発生説／移動説等）から試みられているが、いずれにせよ、その鍵となるのは「国際間の一致」であり、解明には比較民族学的・文化人類学的な考察が必須である。石田は河童や桃太郎に関する説話を出発点にそれを試みたのだが、一方、柳田

は土台となるべきわが国の伝承を緻密かつ大規模に、一国民俗学として、収集し整理し公刊したのである（『遠野物語』、『山島民譚集』、『日本の昔話』、『日本昔話名彙』、『日本伝説名彙』）。座談会を舞台に、柳田と石田は、右に見るように、無限に近付いている。

説話や広義の民間信仰―例えば、穀物霊、樹木崇拜等―に関して考察を進める上に、一国のフォークロアと多国のエスノロジーは、車の両輪として、互いに協力し合うべきことを柳田は強く意識していたにちがいないが、世界の民族学「エスノロジー」あるいは人類学「アンソロポロジー」に寄与すべく、足元を固めるために、彼は敢えて日本民俗学「フォークロア」研究に生涯を捧げたのである。

最後に、柳田は民俗学に関して、かねがね、それが「随筆家風の学者」（『民俗学の話』<sup>91</sup>）を作りがちであることに危機感を抱き、民俗学を「サイエンス」（学問）としてどのように構築するかに苦心した。学問はある種の体系がなければ成立しない。柳田はそのためにモデルを求めて、西洋の学問を意識して体系的に研究した。彼が読破した洋書文献は多岐にわたるが、今回はその中から、1古代ギリシアの「歴史」と「紀行文」（ヘロドトス／パウサニアス）、2ドイツの「文学」と「文献学」（ハイネ／グリム兄弟）、3イギリスの「人類学」（フレイザー）、そして4フランスの「社会哲学」（レヴィ・ブルジュール）、を主に覗いて見た。また柳田の「一国民俗学」を「比較民族学」へと展開するべく努力した岡正雄と石田英一郎の業績についても触れた。いずれにせよ、柳田が心血を注いで研究した西洋の学問は、柳田民俗学の、必ずしも目立たないバックボーンを形成している。

最近ドイツでは、民俗学者クルト・ランケが企画し多くの専門家が協力して順次刊行されていた『昔話百科事典』Enzyklopädie des Märchens (EM) が全十五巻で完結した（一九七七～二〇一五年<sup>92</sup>）。世界のグローバル化と学際化に対応すべく構想されたこの『事典』は、物語を含めた全世界の民俗学／民族学の最新情報を満載している。それはある意味、柳田がかつて夢見ていた『事典』とも言える。その柳田が没してすでに半世紀あまりが経

過した現在、こうした学問的成果を活用して、柳田が切り拓いた日本民俗学をどのように世界の民族学へ繋げてゆかか、それは今日のわれわれに託された課題である。

主要テキスト／参考文献

- \* 増補改訂『柳田文庫蔵書目録』成城大学民俗学研究所、二〇〇三年
- \* 『民俗学研究所紀要』第二十二集別冊、成城大学民俗学研究所、平成十年三月
- \* 定本『柳田國男集』別巻第五「年譜」、筑摩書房、昭和五二年（初版昭和四六年）
- \* 柳田國男『故郷七十年』（『柳田國男全集』二二、筑摩書房、一九九七年）
- \* 柳田國男『青年と学問』岩波文庫、二〇〇七（初版一九七六）年
- \* 柳田國男『民間伝承論』／『郷土生活の研究法』、ちくま文庫『柳田國男全集』二八、一九九〇年、
- \* 『柳田國男事典』野村純一・三浦佑之・宮田登・吉川祐子編、勉誠出版、平成一〇年、
- \* Enzyklopädie des Märchens, hrsg. von Kurt Ranke, Walter de Gruyter, Berlin/New York, Bd. 1-15, 1977-2015. (以下、EMへ略記)

註

- (1) 『柳田文庫蔵書目録』「洋書の部」
- (2) 『故郷七十年』、一九七―一九八頁
- (3) 定本『柳田國男集』別巻第五「年譜」
- (4) 『柳田國男とヨーロッパ―口承文芸の東西』、高木昌史編、三交社、二〇〇六年
- (5) 以下の引用は、柳田國男『青年と学問』（岩波文庫）／『民間伝承論』、『郷土生活の研究法』（ちくま文庫『柳田國男全集』二八）に拠る。

- (6) 註(3)「年譜」
- (7) 野口芳子「幕末にヤーコプ・グリムを訪問した日本人について」(『昔話―研究と資料』四四号、日本昔話学会、二〇一六年三月所収)
- (8) 高木昌史「柳田国男とグリム学」(『現代思想』総特集「柳田国男」、青土社、二〇二二年十月、所収)
- (9) 『柳田国男事典』、七七一―七七四頁
- (10) 『柳田国男事典』、二九頁
- (11) 岡倉天心『東洋の理想』、講談社学術文庫、一九九〇年
- (12) 小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)の後任として、上田敏らと共に英文科の講師となった。
- (13) 『柳田文庫蔵書目録』「洋書の部」
- (14) 『故郷七十年』、一九九頁
- (15) 『青年と学問』、二三二頁
- (16) 『郷土生活の研究法』、五八頁
- (17) 柳田のプリニウスへの言及はこの箇所のみである。
- (18) 「歴史の父」の呼称は、古代ローマの著述家キケロの『法律に就いて』(一・一・五)に拠る。なお、ヘロドトスに關しては、Der kleine Pauly. Lexikon der Antike in fünf Bänden. Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1975. Bd. 2. S. 1099-1103(Herodotos)/EM. Bd. 6(1990). S. 851-855(Herodot)参照。邦訳と解説は、ヘロドトス『歴史』上・中・下、松平千秋訳、岩波文庫、昭和四九年／『ヘロドトス／トゥキユデス』(中央公論社「世界の名著」5、昭和六一年)、「歴史叙述の誕生」村川堅太郎／ヘロドトス『歴史』松平千秋訳。
- (19) 柳田国男「解題集」帝國文庫「紀行文集」(ちくま文庫版『柳田国男全集』三一、三六四―三七八頁)／『柳田国男事典』、三九七頁
- (20) 『民間伝承論』、三三二頁
- (21) パウサニアスに關しては、Pausanias, Description of Greece, Translated by W. H. S. Jones, Harvard University

- Press, Cambridge, Massachusetts, London, England, 2005, 6vols, vol.1, p. ix-xxv(Introduction)/Der Kleine Pauly, Bd. 4, S. 570-572.(Pausanias)/EM, Bd. 10(2002), S. 680-682. (Pausanias)参照。邦訳『パウサニオス著『ギリシア案内記』上・下、馬場恵一訳、岩波文庫、一九九一—一九九二年
- (22) 註(21) EM, Pausanias, S. 680-682.
- (23) James George Frazer, *The Golden Bough. A Study in Magic and Religion. A new abridgement*, Edited with an Introduction by Robert Frazer, Oxford University Press, London, New York, 1994. (Introduction)/EM, Bd. 5(1987), S. 220-227.(Frazer)
- (24) 柳田國男「旅行の上手下手」(『定本柳田國男集』第二九卷、一八三—一八六頁)
- (25) 「幽冥談」(『柳田國男全集』ちくま文庫、三一、一九九一年所収)、六〇—一六〇二頁
- (26) Gerhard Höhn, *Heine-Handbuch*, J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, Stuttgart, 1987, S. 381-384.
- (27) a.a. O., S.299-301.
- (28) 柳田は大正六(一九一七)年に台湾を旅行した。詳しくは、『柳田國男事典』、七二九—七三三頁参照
- (29) 『青年と学問』、二三四—二三五頁
- (30) 『柳田文庫蔵書目録』、五六一頁
- (31) 註(26) Heine-Handbuch, S.299.
- (32) 『郷土生活の研究法』、八四頁
- (33) グリム兄弟の昔話収集と体系的の研究に関しては、マックス・リュートイ『メルヘンへの誘い』、高木昌史訳、法政大学出版社、二〇〇一年、一〇一頁参照。
- (34) 高木昌史『グリム兄弟と日本昔話』、三弥井書店、二〇一五年、「序」。
- (35) アファナシエフについて詳しくは、『柳田國男とヨーロッパ』、高木昌史編、五五—五七頁「ロシア」
- (36) キャンベルについて詳しくは、同書、四二—四一六頁「ケルト系」
- (37) グリム童話の語り部に関しては、『決定版グリム童話事典』、高木昌史編著、三三〇—三三三頁参照。

- (38) 同書、二三七—三三九頁
- (39) レクラム版KHM第三卷
- (40) 『昔話採集手帖』、民間伝承の会、昭和十一年八月
- (41) 『日本昔話名彙』柳田国男監修／日本放送協会編、日本放送出版協会、昭和四七年
- (42) 『青年と学問』、二〇九頁
- (43) 他にタイラー著『人類の初期の歴史と文明の発展の研究』Tylor, *Researches into the early history of mankind and the development of civilization*, New York, 1878.
- (44) EM, Bd.5, S.220-227.
- (45) イギリス人類学派に関して詳しくは、EM, Bd. 1, S.586-591(Anthropologische Theorie)参照。柳田は特に、A・ラング、E・クロッド、G・L・ゴナム、E・S・ハートランドを研究した。
- (46) 『増補改訂柳田文庫蔵書目録』五一七、五二二、五二四、五三〇、五四二頁
- (47) 註(23) Frazer, *The Golden Bough*, p. xiv/(Select Bibliography)
- (48) 田中藤司「柳田文庫所蔵読了自記洋書目録・略年表」(『民俗学研究所紀要』第二十二集別冊、成城大学民俗学研究所、平成十年三月所収)
- (49) 前掲誌、一六頁
- (50) 『海上の道』(昭和三六年)(ちくま文庫版1)、「稲の産屋」の章
- (51) 「国語史のために」(昭和二八年)、『定本柳田国男集』第二九卷、二二〇頁
- (52) 「倉稲魂考」(未完草稿)、『定本柳田国男集』第三二卷、一五九—一六〇頁
- (53) 『神樹篇』(昭和二八年)、『定本柳田国男集』第十一卷、一七六頁
- (54) 『信州随筆』(昭和十一年)、『定本柳田国男集』第二二卷、二三五頁
- (55) 伊藤幹治「柳田国男とJ・G・フレイザーの『金枝篇』(訳書)『民俗学研究所紀要』第二十二集「別冊」所収」等

- (56) 『青年と学問』、二〇六—二〇七頁
- (57) EM, Bd. 8(1996), S. 1002-1005.(Lévy-Bruhl)
- (58) Lévy-Bruhl, Primitive mentality. trby Lilian A. Clare. London, 1923, p.12.
- (59) 柳田文庫には、「レギ・ブルユル」未開社会の思惟」山田吉彦訳、小山書店、一九三五年が所蔵されている。同書は、現在、岩波文庫、一九八三年
- (60) 柳田は、同書英訳簡約版 W・ウンント『民族心理学原理』Wilhelm Wundt, Elements of Folkpsychology. London, 1916を大正九(一九二〇)年六月に読了し、同年翌月再読を開始している(前掲「読了自記」二二頁)。
- (61) 『郷土生活の研究法』、三二頁
- (62) 註(5) EM, Bd. 8, S.1004.
- (63) C.G. Jung, Der Begriff des kollektiven Unbewussten. (Taschenbuchausgabe in elf Bänden. Hrsg. von Lorenz Jung, 4. Aufl., Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1993. Archetypen) S. 45. 邦訳、C・G・ユング『元型論』林道義訳、紀伊国屋書店、一九八二年、一〇頁
- (64) 註(63) aa. O. S.45／邦訳、一〇頁
- (65) 高木昌史『グリム童話と日本昔話』、第七章「比較民話—研究の歴史」参照
- (66) レヴィ・ブルユール『未開社会の思惟』(岩波文庫版)、一五頁
- (67) 『青年と学問』、一八四頁
- (68) 『昔話覚書』(『柳田國男全集』一三、筑摩書房、一九九八年)、五八八頁
- (69) 『青年と学問』、二二〇頁
- (70) EM, Bd.2(1979), S. 540-542. (Franz Boas)
- (71) 石田英一郎司会の対談「民俗学から民族学へ」の中で、柳田はベネディクトの『菊と刀』について所見を述べている。(『民俗学について』第二、柳田國男対談集、筑摩叢書四六、昭和五〇(初版四〇)年、八〇—八二頁)
- (72) Der große Duden, Etymologie, Dudenverlag, Mannheim/Zürich, 1963, S. 746-747. (Volk)



- (73) Menge-Güthing, Langenscheidts Großwörterbuch. Lateinisch-Deutsch, Langenscheidt, Berlin/München/Wien/Zürich, 1988, S. 574. (plebs)/S. 503. (nobilitas)
- (74) 註(72) S. 746-747/Ingeborg Weber-Kellermann, Andreas C. Bimmer, Einführung in die Volkskunde/Europäische Ethnologie, J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, Stuttgart, 1985, S. 17-33
- (75) 『民間伝承論』、二六八—二六九頁
- (76) 前掲対談(註71)「民俗学から民族学へ」の「民間説話の研究」の項(六〇—六二頁)、なお柳田は同対談の中で、「二つのミンソク学」「民俗学/民族学」は末は一つになってしまおうことが私たちの夢である」と語っている(八三頁)。
- (77) EM, Bd. 1(1977), S. 586-591.(Anthropologische Theorie)
- (78) 『民間伝承論』、二三七頁
- (79) 『柳田國男事典』、七四二—七四四頁(岡正雄)
- (80) 岡正雄「日本民俗学への二、三の提案」(岡正雄論文集『異人その他』、大林太良編、岩波文庫、一九九四年)、一八六—一八七頁
- (81) 石田英一郎『桃太郎の誕生—ある文化史的研究』、講談社学術文庫、一九九二年、「年譜」
- (82) 註(71)『民俗学について』所収
- (83) 『山島民譚集』(一)(二)(三)(ちくま文庫版『柳田國男全集』5所収)
- (84) 石田英一郎『新版河童駒引考—比較民族学的研究』、岩波文庫、一九九四年
- (85) 『桃太郎の誕生』(ちくま文庫版『柳田國男全集』一〇所収)
- (86) 石田英一郎『桃太郎の母』、講談社学術文庫、一九九二年
- (87) 石田英一郎『新版河童駒引考』、「新版序文」一一頁、「第一版序文」一七頁
- (88) 石田英一郎『桃太郎の母』、一八五—一八八頁
- (89) 同書、一九五—一九六頁
- (90) 『民俗学について』、六〇—六一頁

(91) 『定本柳田國男集』第二四卷、昭和六二年、四九三頁

(92) Enzyklopädie des Märchens(EM) 本『事典』は柳田が活用したJ・ホルテ／L・マッケンゼン編『ドイツ昔話辞典』Handwörterbuch des deutschen Märchens, hrsg. von Johannes Bolte und Lutz Mackensen, Walter de Gruyter, Berlin, Bd. 1, 1933/Bd. 2, 1940が、第二次世界大戦の混乱の中、第二卷Gの項で頓挫した後に、K・ランケが企画し、多数の専門家の協力で完成された。いわば柳田の夢を実現した『事典』である(『郷土生活の研究法』、七六頁)。

〔付記〕 本稿は、平成二十九(二〇一七)年六月十日(土曜、午後一時三十分～三時)に開催された成城大学民俗学研究所・平成二十九年度公開講演会／成城学園創設百周年記念講演会で発表された「柳田國男と西洋の学問」の原稿である。

当日、講演を聴講して下さった方々、また講演に際してお世話になった民俗学研究所長、松崎憲三氏とスタッフの皆様から感謝申し上げます。

講演の最後に、柳田國男が同時代の学問に関する情報をどこから入手したのかについてご質問がありました。即座には回答できませんでしたが、ここで補足させていただきます。

柳田は西洋の学問動向を知るために、民俗学・民族学関係の年鑑や学術雑誌(英語、独語、仏語)を多数購読していました。例えば、ベルリンで刊行されていた『民俗学学会誌』Zeitschrift des Vereins für Volkskunde, Berlinは、一九一一年の第一巻から柳田のジュネーヴ滞在期の第三四卷(一九二三年)まで揃っており、そこで発表された諸論文から彼は同時代の貴重な情報を獲得しました。彼の学問にとって、年鑑や雑誌がいかに重要な役割を演じていたかが窺われます。(増補改訂『柳田文庫蔵書目録』参照)

(成城大学名誉教授  
民俗学研究所元所員)